

たまいたさい川柳



巻頭言

理系バカということ

願法みつる

昨年のノーベル賞受賞日本人受賞者の、人当たりの良い姿に、嬉しい印象を感じたのは私だけだろうか。確かに過去にはコチコチの理系科学者も居られたが、近年の受賞者は、皆さん揃って文理融合の人格者だと思う。

理系という狭視野の世界で育った自分が、幸か不幸か川柳などという文系世界に身を置いてみると、対社会生活上、心底、違和感を覚え失敗することも多い。そして自らは、理系バカなのだと思点している。

確かに、政治でも社会でもまた川柳界でも、融通の利かない理系ニンゲンが事を荒立てていることが多い。否、荒立てないまでも、煙たがられたり冷視される場面も多い。しかし一方、文系ニンゲンも亦同じなのだ。

ちっぽけなニンゲン関係が織りなす家庭生活の場ですら、共に暮らす文系・理系のセンスが絡み合っている。これだけ進歩した地球上で、今更文系・理系の優劣や得失やら有用性を弁別して論じるのは、不要なのではないか。文理融合のニンゲン性こそ必要なのだと思う。

しかし・・・と、理系バカは訴えたい。数学はニンゲン必須の学問だ・・・と。数学的センスに欠けたり、歪んだ算盤の上に胡座をかく文系の方には、解って欲しい。

川柳を、文系・理系共有のセンスで語りたいものだ。

日日是好

願法みつる

国盗りの歴史に揺れる離れ島

及び腰大老井伊の苦笑い

虚と実が国家予算が誑かす

寺子屋の和算を知らぬ財務省

居て欲しい笑う羅漢が一人減り

百均の数珠で見送る南無阿弥陀

原石のまままで光を見ずに老い

赤い水湧いて河口を朱に染め

牝猿の賢しら口に風が立ち

平成28年
2月号 (No.675)

日川協加盟